ドリーム×マイスター

Dream×Meister

土の温かさに触れ 人の温かさを知る

北野阿貴（34）　脱サラ後、農業大学校で２年学び、農家として今春デビュー
現在、羽曳野市碓井の畑を耕し、うすいえんどうなどをつくる

碓井豌豆【うすいえんどう】

羽曳野市碓井地区発祥の春野菜。そのルーツは明治時代にまで遡る。南河内では唯一の「なにわの伝統野菜」に認定されている。家庭では豆ごはんや玉子とじなどで食卓に並び、彩りを添える。収穫時期は5月上旬～中旬。豆は皮がやわらかく、甘みとコクがあるのが特徴。植物性たんぱく質をはじめ、多くの栄養素を含む。

土に触れ目覚めた、農業への思い

学生時代、農業を始めた知人を手伝ったのが、初めての農業体験です。夏休みを利用した１カ月間ファームステイで、農業ってこんなに面白いんだと衝撃を受けました。それまではブランド品を持っておしゃれを楽しむ女子大生だったのに、一気に農業の魅力に取りつかれました。

農業を始めるには資金が必要だと、大学卒業後は建設関係の会社に就職。10年間勤めた後退職、農業大学校で学ぶこと２年。卒業を控えた昨年秋、大阪府の就農相談窓口に南河内地域での就農を希望したところ、羽曳野市碓井地区の農地（1,000㎡）を使用させてもらえることになりました。

思い通りにいくと楽しい。でも、いかなくても楽しい。

碓井豌豆をはじめイチゴや玉ねぎなどを育てています。自然相手の仕事なので、予想外の現象に戸惑うことばかりですが、周りには先輩農家さんや農大時代の同窓生など、アドバイスをくださったり、機械を貸してくださったり。羽曳野の人のあたたかさにいつも感謝の気持ちでいっぱいです。

▲畑の様子をお互い気にかける農大の同窓生ら

▲出品された野菜をじっくり観察　品評会にて

伝統ある野菜の地産地消

碓井豌豆のことを知り、発祥のこの地で作りたいと強く思いました。幼い頃から、自分の生まれ育った土地で採れた農産物を見て、触れて、食べて、もっと身近に感じてほしいです。

私が農業を志した14年前に比べ、現在は農業が始めやすい環境になりました。国や自治体などが就農者の支援を行っていることもあり、就職先に「農業」を選択できる時代になっています。決まった休日があるわけではないし、好きじゃないとできない大変な仕事ですが、土に触り、毎日少しずつ成長する植物たちを見、自然の力を借りて生きることを実感するのは、私にとって何よりの喜びなんです。若い世代の就農者が増え、地産地消につながればと願います。

●農家数・農地面積の推移（羽曳野市）

	農家数（戸）	農地面積（ha）
2005年	875	305
2010年	790	198
	（▲85）	（▲107）

※ 農林業センサス

●全国の実エンドウ生産量ランキング

順	都道府県	生産量（t）
1	和歌山	2,708
2	鹿児島	1,351
3	大阪	259
4	北海道	121
5	福岡	90

※ 農林水産省 H23年野菜生産出荷統計データ

高齢化により農家数は年々減少傾向にあるが、就農支援制度の充実とともに、農業を志す若者は増えている。理由は「農業や農村の生活に魅力を感じる」「自然や動物が好き」など様々。

また、農林水産省では、「地域の活力創造プラン」において、平成35年までに、40代以下の農業従事者を40万人にまで増やすことを目標としている。

「なにわの伝統野菜」

品種改良や食生活の変化により、歴史ある野菜が消えてしまわないよう守っていこうという大阪府の取り組み。認定および登録には「約100年前から府内で受け継がれ栽培されてきた」などの条件を満たす必要がある。

現在、登録数は17品目あり、碓井豌豆は平成20年8月に17番目の伝統野菜となる。